

「桶物語」の背景と意味

—— スイフト的世界へのアプローチ

高 山 修

ま え が き

He gave the little wealth he had
To build a house for fools and mad;
And show'd by one satiric touch,
No nation wanted it so much.

—Swift's *On the Death of Dr. Swift* より—

『桶物語』の作者は、云うまでもなく『ガリヴァ旅行記』を書いたスイフトである。『ガリヴァ旅行記』を書いたが、六十六才に近いスイフトであるのに反して『桶物語』の作者は、三十才になつたばかりの若いスイフトである。

『ガリヴァ旅行記』と云えば、誰でも知つてゐる。しかし本の名や物語の筋がよく知られてゐる割に、作品の真意や真価については、案外知られてゐない。子供のころに、絵本や

物語の本を通して、『ガリヴァ旅行記』に接した多くの人が、大人になつて、その同じタイトルの『ガリヴァ旅行記』を読むことに、一種のてれくささを感じるからである。有害なてれくささである。スイフトの世界はお伽噺の世界ではない、近代のイロニーを予言したきびしい世界である。

『ガリヴァ旅行記』は、すぐれた文学作品である。物語の筋だけを追えば、他愛もない物語である。しかし、よく読むことによつて、あたらしい意味が、絶えず見つけだされる作品である。現代の読者は、馬の国に興を馳せてゐる時、ヤフーのみにくい姿に自らの姿を見出して、ぞつとするだろう。それだけに、むつかしい作品である。そして、『桶物語』は、もつとむつかしい作品である。スイフトと同時代のヴォールテールは、『哲学書簡』の書簡第二十二で、「イギリスのラブレール」としてスイフトをとりあげ、『桶物語』が、フランスでは「ちんぷんかんぷんなもの」であるとのべ、「彼

を充分理解するためには、彼の国へ一寸行つてみなければならぬ」とその難解さを説いている。その「彼の国」である英國においてさえ、初版後数年して出版された『桶物語』の第五版には、この作品についてのスイフト自身の“Apology and Explanatory Notes”がつけられ、作品理解の一助とされた。また、これと殆ど同時に、*A Complete Key to the Tale of a Tub*と題する小冊子が発行されて、『桶物語』の註釈書の役目を果したほどである。だから、われわれにとつて『桶物語』の意味を把握することは、容易なことではない。

『桶物語』は、重要な書物である。『ガリヴァ旅行記』とともに、スイフト的世界の金字塔である。『桶物語』執筆当時すでに、思想的に、また文学的技法において、成熟の域に達していたスイフトは、この作品に、彼の天才を遺憾なく発揮した。彼の天才は、彼の時代に安住するものではない。彼の天才は、彼の生活と思想とが、彼の時代の社会的環境と時代思想の絆のなかで、軋りながらたてる不協音のなかに感じとられるのである。絢爛たる天才でも、誇れる天才でもない。孤高の天才でもない。近代の子として生れながら近代人になりえなかつたスイフトの天才は、なやめる天才である。なやめる非近代的近代人のうめきは、現代人の魂のなかに、なまなましく余韻している。

スイフトの時代は、現代人にとつて、とくに意味深い時代

である。それは、ヨーロッパ文化の近代化の方向を決定した時代であると云う意味において、現代に直接むすびつく。時代の川底に足をふまえながら、時代の流れに抗したスイフトは、彼の時代の鋭い批判者である。と同時に、現代の批判者でもある。ペシステイックな批判者である。余りにも、非近代的である、そして、現代的である、現代文化の明日について、われわれが感じる危機を、スイフトがすでに感じていたと云う意味において。しかし、彼は、形而上学的思想家でも、哲学者でもなかつた。すなわち、近代的人間に反逆しながら、それにかわる人間像をつくりえなかつたと云う点、いかえれば、近代的価値に危機を感じながら、それにかわる価値体系を提起しえなかつたと云う点に、ペシステイックなモラリストとしてのスイフトの限界がある。実に、なやめるスイフトの世界は近代ではじまり、現代で終るべき近代的イロニーの世界である。

この小論において、私は、『桶物語』の歴史的背景と意味をとらえることによつて、かかるスイフトの世界へのアプローチを試みた。もちろん四苦八苦のアプローチである。

英文学史上、十七・八世紀は、最近まで、案外かえりみられなかつた。ことに、私がこの小論において試みたようなアプローチは、いまだ充分完成されていない。全くの en route である。この点、米国の諸大学における一連の英文学研究者たち—その多くは George Sherburn, R. F. Jones, James

M. Osborn, Arthur E. Case などの門下たちによつて続けられてきた研究の成果は、極めて注目に値する。そして、私が、この小論を書きあけるまでには、これらの人々の研究から、多くの貴重な示唆と援助とをうけたことを、はじめに申しそえておく。

Ⅰ 中世から十八世紀へ——近代化の歩み——

ジョナサン・スイフト (Jonathan Swift) は十七世紀の後半から十八世紀の前半にかけて、アイルランド及びイングランドを舞台に、七十八才の生涯を送つた。英文学史上、スイフトは、いわゆる「十八世紀英文学」の分野でとりあつかわれるのが普通である。私はこのことに対して、とりたてて異議を唱えはしないが、一般に、歴史的叙述における時代区分がそうであるように、文学史上における時代区分も、極めて曖昧なものである。そして、この曖昧さが、ときどき途方もない誤解や先入観を植えつけることがある。とくに、スイフトの場合のように、作品が時代と切つてもきれぬ関係にある場合にはその時代的な位置づけに関して、極めて慎重であらねばならない。

近代作家とか、近代詩人とか、近代文学とか云うことばが使われる。スイフトが近代作家であり、スイフトの文学が近代文学に属すると云うことには、異論はなさそうだ。それは近代——ヨーロッパ文化の歴史における——といつ頃はじま

るのか。そして、スイフトはこの近代のいかなる時期に位置するのか。かかる問題について、まず考えてみたい。

近代文化の出発点について、ルネッサンス期及び宗教改革の時代をもつて、近代文化がはじまると云う見解が、もつとも常識的であるようだ。しかし、一概に、近代文化と云つても、それが今日の現代文化の諸様式を形成した母胎でもあることを考えると、ルネッサンス期をもつて近代文化がはじまるときめつけるのは、すこし無謀である。近代文化の形成過程には、その様相の変化にしたがつて、いくつかの段階が認められる筈である。勿論、複雑な過程である。この複雑な近代化の過程のなかに、スイフトの人間像およびスイフトの世界の背景を、できるだけ正確にとらえるために、主としてハーヴァード大学のヨーロッパ思想史の教授 Crane Brinton の著書 *Ideas and Men* (1950)¹ にしたがつて、ヨーロッパ文化の近代化の過程に一瞥を与えたい。

結論的なことから云つてみれば、こうである。中世の世界は、一四五〇年を中心とするルネッサンスの勃興期とともに決定的な変容をはじめた。しかし、同時に近代世界が完成したのではない。現代文化の直接的な母胎となつた近代文化の基調は、十八世紀を中心とする「啓蒙時代」にほとんど完全に整うのである。すなわち、一四五〇年から一七〇〇年に至る間は、中世的世界から近代的な世界への過渡期である。以上

のことを、もう少し詳しく説明してみよう。

(1) 中世世界の基調。—戦争、封建的束縛、経済的不平等などに満ちる中世世界は、政治的、経済的には、決して安定した世界ではない。しかし、中世人は、一種の安定感のなかに生きていた。この矛盾したような世界を支えた基調について、三つの点が挙げられる。第一に、超自然的なもの—神—に対する信仰である。第二は、想像力のゆたかさ、すなわち異常なもの、無限的なものへの真摯な追求心である。第三は度重なる暴挙である、すなわち戦争や殺人は、政治的、経済的に極めて不安定な世界に住んでいた中世人にとつて、それほど珍しいことではなかつた。この三つの点を中世文化の基調であると云われてみると、われわれは、そこに大きな矛盾を感じてであろう。すなわち、神への深い信仰や無限的なものへの追求心に基礎づけられる安定感とともに、極めて残忍な、不安定な現実が存在したと云うこと。しかし、この矛盾こそ、中世文化の基盤を理解する鍵なのである。

中世人の生活における安定 (security) は、われわれ廿世紀人が考える安定とは、根本的に異なる。中世人は地上における天国を、当てにしなかつた。日常生活における貧沢、医学の進歩、道路の改良などの如き世俗的な安易さを、現世に求めようとはしなかつた。むしろ、陰惨な現実が、来世的な求済への彼らの憧れを、たかめたとも云える。中世人にとつて彼らの生活を左右し、彼らの運命を決定する力は、彼ら自身

の手中にはなく、神の手中にある。この世は、人間の魂にとつての試煉の場所であり、ローマ教会が教える戒律にしたがつて、正しく生きることによつて、この試煉に堪えた人々には、来世における救済が約束されるのである。そして、この来世的な救済への深い憧れこそ、中世人のキリスト教的信仰の核心を支えるものである。すなわち、キリスト教は、中世人に、来世における天国を約束すると同時に、争いや不安な物質的缺乏に満たされた現世の生活に、意味と目的とを与えた。すなわち、彼らは、神の前における人間の弱さや限界を知ればこそ、神への帰依を通して、現世的な不安定を、一種の安定感に変えることができたのである。このように、人間が根本的に自らを神にゆだね得た世界であつたが故に、社会的には不安定であつた中世世界も、**▲神の世界▼**であり得たのである。

そして、人々と神との間にたつて、このキリスト教的世界を統一したのは、ローマ教会である。教会は、強力な権力ときびしい戒律によつて、人々の自由な思考を束縛した。しかしそのことが、かえつて、人々の神への帰依を深めたことは疑えない。かかる世界のなかで中世文化が育つたのである。

(2) 近代化のきざし—ヒューマニズム—。しかし、一四五〇年頃から十七世紀の後半にかけての時代、すなわちルネッサンスや宗教改革を中心とする時代は、中世世界の基調の変

質と分解とを決定化し、ここに近代世界の育成期がはじまる。一般に、学芸の復興、宗教改革、自然科学の勃興、貨幣経済に基く新しい経済体制などが、近代化の基盤として、とりあげられるが、かかる現象面だけをとりあげるだけでは、近代化の基調をあきらかにするのに、分で不充ある、とBrinton教授は説く。もちろん中世から近代への推移の過程にある文化の諸要素をとらえることは、容易なことではないが、同教授は、近代化の基調を、つぎの三つの点からとらえようとする。すなわち、ヒューマニズム、プロテスタンチズム、合理主義である。その各々について、考えよう。

まず、ヒューマニズムについてであるが、ここで云うヒューマニズムとは、ルネッサンス期のヒューマニストの態度である。どのような態度か。ヒューマニストは、世界観において、第一義的に、神学的でも、合理主義的でもない。すなわち、中世的でも、近代的でもない。彼らは、神学中心の中世的理念、すなわちスコラ哲学に具現されている中世的な思索態度を許容しないが、中世的な価値にかかわる価値を發見したプロテスタント的世界観や合理主義的世界観をも、うけいれない。すなわち、ヒューマニストは、中世的な宇宙観に對する意識的な反逆者ではあつたが、それにかわる新しい宇宙観を築きあげたのではない。彼らは、教会の權威から人間を解放した。徹底的な個人主義者―自己中心主義者―であるヒューマニストは、自分自身になろうと努めた。しかし、その

自分自身から何をつくりだすべきかについては、明確な結論をもつていなかつた。

ルネッサンスを舞台に活躍するヒューマニストは、特権階級、すなわち一般大衆とは遊離したエリットたちであり、彼らがなした中心的な仕事は、ギリシャ・ローマ文化を再發見し、古典を通して大いに學識を高め、学芸の諸分野に、ルネッサンスの華を咲かせたことである。

ヒューマニズムは、ルネッサンスの華を咲かせたと同時に、中世への反逆でもあつた。ルネッサンスを招来した条件については、政治的、経済的諸条件を無視することはできない。しかし、ヒューマニズムが、中世への反逆として生れるのは、中世世界においてローマ教会の權威に支えられてきた理想と現実の大きなギャップ、すなわちキリスト教的理念と、戦争や封建的桎梏に満ちる現実との間によこたわる大きなギャップが、限界に達したことを意味する。ヒューマニストは不安定のなかの安定と云う矛盾に基礎をおく重苦しい中世的世界の窓をあけて、新鮮な空気を吸い込んだのである。

もちろん、彼らの態度には、生新の氣に溢れ、ひたすら人間中心を謳歌して止まぬ放逸な態度から、古典的秩序のなかに調和を求めようとした抑制的な態度まで、種々相がみられる。また、政治思想の見地からみれば、ヒューマニストのエリットとしての強い自意識が、貴族主義的、君主主義的傾向を生んだと云うことも認められる。しかし、すでに云つたよ

うに、彼ら自身の新しい価値体系をもつて、自らの世界観をつくりあげなかつたと云う意味において、彼らの世界には、ローマ教会に支えられた中世的な統一も、合理主義に基礎づけられた近代的な前進もなかつた。しかし、ヒューマニズムは、神学的な、来世中心の中世界からの脱却を試み、人間中心の、現実的な、世俗的な世界への途をひらいたと云う意味において、中世の破壊者であるとともに、近代化の推進者でもあつた。しかし、ヒューマニズムは、中世的なものを完全には、清算しきつていなかつたし、十七・八世紀の啓蒙主義者や合理主義者の如く、人間の進歩を確信して、地上の天国を夢みる近代的オプティミストでもなかつたと云う意味において、決して近代的人間像の完成者ではあり得なかつた。

(3) プロテスタンチズム。—プロテスタントによる運動は歴史的事件としては、十六世紀の初頭から、ルッターやカルヴァンを中心として行われた宗教改革となつてあらわれるが、プロテスタンチズムも、ヒューマニズムと同じく、中世世界における神学的—キリスト教的—理想と、争いの絶えぬ現実との矛盾を、きりぬけようとするあがきの一つのあらわれである。勿論、Max Weber によつて究明された重要な点、すなわち宗教改革と資本主義勃興に伴う経済的諸条件との関係、あるいは、ナショナルイズムの勃興に伴う政治的条件との関係が、プロテスタンチズムの展開を理解する上に、

重要な意味をもつことは疑えないが、プロテスタントの運動は、本質的には、やはり神学的 (theological) なものであつた。

プロテスタンチズムの運動は、宗教改革と呼ばれるけれども、運動に参加したプロテスタントたちは、決して改革を行つていたのであるとは考えていなかつた。彼らは、ローマ教会の権威によつてまげられたキリスト教から、真のキリスト教への復帰、すなわち究極的には、イエスへの復帰を試みているとの自覚をもつていた。しかし、彼らの運動が、結局、種々の教会、各種の分派を生み、必ずしも彼らがいだいた理想的な自覚が果されたのではなかつたと云う事実は注目し得る。

勿論すでに觸れたように、プロテスタンチズムは、規律、儀式、組織、伝統など外的な附屬物をもつローマ教会の既成権威に対する反抗として、生れた。ローマ教会が、人間と神との間に存在する障壁物であることに気づいたルッターやカルヴァンは、教会の権威に反抗し、人々に、教会の媒介を通してではなく、直接に聖書を通して、神の意志を教えようと試みた。たしかに、改革者たち—ウィックリフ、フス、ルッター、カルヴァンなど—は、人々の間に、母国語の聖書を普及させ、ローマ教会の権威のかわりに、聖書の権威、すなわちイエスの権威を与えようと試みた。しかし、人々は、聖書を通して神の意志を知るためには、聖書の解釈を必要とし

た。改革者たちが、その解釈者の役目をつとめた。ルッターは、ルッター流に聖書を解釈することによつて、「ルッター教会」の権威をつくりあげたのである。既成の権威に従わぬ革命的なプロテスタントたちが、結局は自分自身の権威をつくりあげて、他に強制する結果となるのである。これは皮肉な結果である。しかし、これは、フランス革命やロシア革命における革命者たちが辿りついた皮肉な運命でもある。

では、プロテスタント教の指導者たちは、いかなる態度で、聖書を解釈したか。Brinton 教授の見解によれば、根本的な態度においては、中世的なキリスト教の態度と大差はなかつた。第一に、原罪についての伝統的なキリスト教的の教理を、プロテスタント教はとりいれた。たとえば、カルヴァンは、人間の獸的な性格についてのカトリック的な考えを一そう強化したとも云える。ルッターにおいても、この傾向はみられるのであつて、プロテスタント教のなかには、人間は生れながらに善なるもので、完全に向つて無限の進歩をとけるのであると云う啓蒙時代—十八世紀を中心とする—のオプティミズムは、みられないばかりか、人間の完全性(perfectibility) に対する否定的態度がみられる。第二に、プロテスタント教は、人間の理性にあらゆる権威を集中する合理主義的立場を、うけいれない。むしろ中世後期のローマ教会の安易な形式主義的戒律から脱して、個人の魂のなかに、深い宗教的感情をはぐくんだと云う意味において、非合

理的な情念を、人々に植えつけたとも云えるのである。第三に、初期のプロテスタントたちは、異端に対して、決して寛大(tolerant)ではなかつた。勿論、キリスト教史上において、tolerance がはじめて公に認められたのは、プロテスタントの国々—とくに英国—においてであつたが、それは、カトリック教徒やプロテスタントの分派の間における争いを避けるために生じたのであつて、決してプロテスタント教本来の態度ではなかつた。

このように、三位一体説に基く熾烈な超自然的態度、原罪についての深い意識、他の宗派に対する排他的態度を示すプロテスタント教は、根本的にキリスト教的であると云う点においては、中世的なキリスト教と本質的に変らないが、中世のカトリック的世界よりも、一そうきびしい世界であつたと云える。彼らの神は、中世の神よりも、もつと暗い、もつと神秘的なものであつたに違いない。しかし、彼らが人々をローマ教会の桎梏から解放して、神と人間との直接的な交わりを試みたと云う点において、中世への反逆者であり、近代化の推進者であつた。

(4) 合理主義—近代科学の勃興—。近代化の第三の基調は、合理主義と、それを確証づけた近代科学である。この第三の基調こそ、ヨーロッパの近代化を決定したものであり、この小論がとらえようとするスイフトの世界を理解するため、の大きな鍵である。

合理主義 (rationalism) は、多種多様に定義されるが、Brinton 教授にしたがえば、この合理主義と云う抽象名詞は宇宙—自然界—の動きは、人間の合理的、客観的な思索作用に相通するものであり、われわれは、数学上の問題を解き得ると同じく、人間のあらゆる経験を理性によつて、解き得る、と云う信念に基く諸理念を抽象したものである。このことは、論をすすめるにしたがつて、次第にもつと明かになるであらう。

合理主義の哲学的基礎をきづきあつた代表者として、フランシス・ベーコン、デカルト、ホッブス、ロツクなどが挙げられる。十七世紀のはじめに、ベーコンが確立した帰納法は合理主義的態度への大きな接近である。しかし、合理主義哲学の基礎を確立したのは、ベーコンの後継者とも云うべきデカルト、及びホッブスである。彼らが示した合理主義的態度は、決して一様なものではなかつたが、合理主義の哲学一般に通ずる特性は、次のようなものである。合理主義者は、ヒューニストやプロテスタントの両者よりも、遙かに徹底的に、ローマ教会のカトリシズムによつて代表される中世的伝統を拒否する。勿論、個々の合理主義者の態度には、いろいろな点で、合理主義とキリスト教的信仰との妥協が見出せるが、本質的には、合理主義は、キリスト教と相反する。合理主義者は、宇宙から超自然的なものを抹殺する。自然の構造や法則は、理性によつて、解明できるものであり、自然的

なものは、すべて合理的なものであつて、超自然的なものは存在しない。すなわち、合理主義は、人間を、完全に自然の機構—物質的世界—のなかに置く。そして、あらゆる人間が具有する理性によつて、人間は自ら、自然の法則のなかに、善悪の基準を発見し、その規準によつて、自らの行動を正しい方向に導くべきである、と説く。いいかえれば、中世人がローマ教会の教理や慣習のなかに見出した指導原理や価値基準を、合理主義者は、感覚に映ずる物質的世界や経験の世界に見出さんとした。どのようにして、見出さんとしたのか。われわれが、数学上の問題を解く場合の鍵となる合理的精神、すなわち理性にもとずく辛抱づよい研究心を働かせることによつてである。この点において、合理性は、形而上学的性格から実験的、実証的性格をもつに至る。(このことは、合理主義に対するスイフトの態度を理解する場合に重要な意味をもつものである。) この合理主義の実験的性格を決定的にしたのは、近代科学である。合理主義は、近代科学を背景にして育つ。そして、近代世界の思想的基礎は、実に近代科学に支えられる合理主義であり、近代世界の技術文明の基礎は、合理主義を支えている近代科学なのである。それでは近代科学は、どのようにして起つたのか。

自然科学の起源は、二千年前のギリシヤ文化にさかのぼるが、古典時代に続く暗黒時代と中世は、自然科学に背を向け、その発達を拒んだ。それ故、現代の自然科学の母胎であ

る近代科学の基盤は、十六、七世紀を中心とする近代の過渡期において、着々と築かれたのである。十六世紀にはコペルニクス、ガリレオがあらわれ、天文学における彼らの業績は中世的宇宙観に鋭いメスを加えた。十七世紀には、ニュートン、ケプラー、ヘーヴェイ、パスカルなどの名とともに、British Royal Societyの設立（一六六〇年）及びAcadémie des Sciencesの設立（一六六八年）が注目される。この時代における科学の勃興は、ただちに知識人の注目を浴びたわけではなく、初期のヒューマニストやプロテスタントたちはこれに背を向けたほどであったが、次第に、知識人の心に入り込み、合理主義的精神の育成を助長した。

この時代に何故自然科学が進歩したのかと云う問題について、外的条件としては、中世における火薬や新しい兵器の発明工夫、地理上の発見や貨幣経済の勃興に伴う交易手段の改良など、種々あひられるが、心理的背景としては、中世的権威からの解放が促した未知のものへの好奇心や、経済機構の変化とともに高まる物質への関心が、人間を、物質や自然現象の解明へ駆りたてたことが考えられる。また、同時に、形式的な権威に対する尊敬が失われ、既成の権威にたよらないで、実験や観察によつて、未知のもの、不確かなものを解明しようとする実証的態度が、科学の進歩を大いに助長したと考えられる。

しかし、近代科学と合理主義との関係が、如何に密接なも

のであらうと、科学そのものが合理主義と同じものであると考えてはならない。近代科学を、中世のスコラ哲学にかわるNew Philosophyとしてとらえた当時の人々には、この区別は明確に自覚されていなかったが、これは、大切な問題である。科学は、根本的には、形而上学と結びつかない、すなわち、科学は、宇宙観や世界観や運命観についての形而上学的問題に答えるものではない。その対象は、自然的なもの、物質的なものであり、その所産は、新しい知識、新しい技術、新しい製品としてあらわれる。これに反して、合理主義は、既述のように、宇宙観や世界観についての解答を準備する。そして、この解答が、実証哲学、無神論、理神論、唯物論、民主主義として、あらわれるのである。科学と合理主義との間には、根本的には、以上のような区別がなされねばならない。

しかし、自然科学発達の助成者となつたのは、いまは未知であるものも何時かは理性の働きによつて解明されるであろうとの合理主義的確信であり、そして、逆に合理主義的精神に確証を与えたのは、自然科学の業績である。ことに、十七世紀の後半におけるニュートンの出現は、科学上の大規模な知識に基く「宇宙の統一的原理」によつて、中世的世界観を完全に打破し、合理主義そのものに実証性を与えた。このように、近代科学の影響のもとに、合理主義が実証的、実験的性格を及ぼるに至つて、近代の世界観は、形而上学的なもの

から、自然科学の所産である技術文明に基く現実的な世界観となる。

近代人、とくに十八世紀の啓蒙時代の人々の世界観、人観の根柢によこたわるものは、「進歩」の理念 (the idea of progress) である。すなわち、人間は生れながらに完全性を具有しており、人間の文明は、完全の方向に絶えず進歩しつつある、と云う考えである。十六・七世紀の合理主義と科学—ヒューマニズム、プロテスタンチズムも、間接的には、その要因として含まれるが—によつて準備され、十八世紀の啓蒙主義者によつて、確立された「進歩」の理念は、近代が辿らねばならなかつた運命を解く大きな鍵である。この問題については、追つて觸れることにならう。

以上、主として、Brinton 教授の見解にしたがつて、中世から近代への思想的背景を簡単にのべた。この近代化の育成期を経て、十八世紀の啓蒙時代が始まるのであるが、スイフトが生れるのは、まさに、十七世紀が終り、十八世紀が始まろうとする時である。

(註) 1 Crane Brinton, *Ideas and Men* (New York, 1951).

II なぜ『桶物語』が書かれたか

スイフトの『桶物語』(A Tale of a Tub) が『書物の戦争』(The Battle of the Books) と『精神の機械的作用』(The Mechanical Operation of the Spirit) とともに、一

巻にまとめられて、出版されたのは、一七〇四年である。『桶物語』の執筆年代については、種々異論があるが、一六九六年から一六九九年までの間とする A. C. Gutschelch 及び D. Nichol Smith の見解¹に従うのが、妥当であると考える。だから、この作品は、十七世紀の黄昏に書かれ、十八世紀の夜明けに出版されたわけである。一六六七年生れのスイフトは、当時、三〇才になつたばかりの若者であつた。因に、この頃の日本は、ちようど西鶴や芭蕉や近松の時代であつた。—さて、『桶物語』執筆当時までの、スイフトの身の上を、簡単にたどつてみよう。

(1) スイフトの青年時代。—ジョナサン・スイフトは、一六六七年十一月に、アイルランドの主都ダブリンで生れた。父は同じ名のジョナサン・スイフト、母はアビゲール (Abigail)、兄弟はなく、姉が一人いただけである。父ジョナサンは、スイフトが生れる七ヶ月前に、死んだ。父親をもたぬスイフトの幼少年時代は、叔父ゴッドウイン (Godwin Swift) の世話になつたり、乳母のもとで育てられたり、決してめづまれたものではなかつた。ダブリンの Kilkenney School を終えて、同市のトリニティ・カレッジ (Trinity College) に入學したのは一六八二年、十五才の時である。学生時代の彼は、決して、出来のいい学生ではなかつた。後年になつて発見された一六八五年の同大学の成績表によれば

スイフトはギリシヤ語やラテン語においては優秀な成績であつたが、哲学(当時、オクスフォードやケンブリッジにおいては、すでにルネッサンスの影響のもとに、新しい哲学の風潮がおこりつつあつたが、トリニティ・カレッジにおいては、いまだに中世的なスコラ哲学が重視されていた)や神学においては、てんでお話にならぬほどの悪い成績であつたらしい。しかし、歴史や詩作の勉強には、かなり力をうち込んでいた。なんとか仮及第(speciali gratia)の恩恵に浴してB.A.の称号をもらつて、卒業したのが一六八六年、それから更に三年間M.A.の称号をとるために、同大学—大学院とでも云うべきところだが—にとどまつたのであるが、その間の彼の品行は放埒をきわめ、大学の礼拝はさぼる、おそくまで巷をぶらついて、寮の門限には間に合わぬ、点呼はさぼる、と云う有様で、大学当局の譴責処分をうけること幾度か、結局M.A.どころではなく、一六八九年、アイルランドに内乱がおこり、ダブリン市中が争ひの渦中に巻き込まれるに至つたのを機に、アイルランドを去つて、イングランドへ渡つた。もちろん、はつきりした当てがあつたわけではない。今まで、なんとか世話をしてくれた叔父ゴッドウインは八八年に死んだし、これ以上他人の世話になる卑屈さに我慢ができず、母アビゲールが移り住んでいるイングランドへ渡つて、ちだつをあげようとも考えたのであらう。

イングランドに渡つた彼は、母をレスター(Leicester)の

町に訪ねるが、同年の春、彼の生涯を通して彼の思想に多大の感化をあたえたウイリアム・テンブル(Sir William Temple)と相知るに至る。廿一才の時である。スイフトの叔父ゴッドウインがテンブルの友人であつたことや、テンブル夫人がスイフトの母と血縁關係にあつたことが縁で、スイフトは、テンブルの書記として、ロンドンに近いサリー(Surrey)州のムーア・パーク(Moor Park)のテンブル家に落ちつくことになつた。一六九〇年、九四年、九五年の三度にわたつて、しばらくアイルランドへ渡つた以外、一六八九年から、テンブルが死ぬ一六九九年まで、ムーア・パークでの生活が続くのである。

スイフトの生涯におけるこの時期は、いろいろな点で、彼の生涯中もつとも重要な時期であるといえる。テンブルとの個人的接觸によつて、大きな影響をうけたことは勿論、テンブルの藏書を読み漁つたのも、この時期においてであるし、『ステラへの書簡』(The Journal to Stella)によつて後代に名をのこし、スイフトの奇妙な恋愛事件の主人公として後代の伝記作者や好事家たちの注目を浴びたステラ(本名は Esther Johnson)と相知つたのも、この時期である。そして、『ガリヴァ旅行記』とともに、スイフトの最大傑作の一つである『箱物語』の構想をねり、執筆を企てたのも、この時期である。『箱物語』の直接的な背景及びその執筆の要因に觸れるまえに、テンブルについて、少し觸れておく必要が

あちろ。

(2) ウイリアム・テンブル(一六二八—九九年)。一テンブルは、その壮年時代を、政治家、外交官として、英本国及びヨーロッパ大陸を舞台にして活躍したが、その晩年は、ムア・パークの隠居で、悠々自適の文筆生活を送つた。スイフトが彼の書記をつとめたのは、テンブルの晩年時代、すなわちムア・パークの時代である。

Ricardo Quintana が指摘している如く²、テンブルについての後代の評価は一樣でない。しかし、彼が、典型的な十七世紀的紳士であつたことは、種々の点から、充分想像できることである。彼は、政治家、外交官としての多忙な生活のうちにも、絵画、音楽、彫刻、庭園などに趣味をもつていた。そして、自分の高い地位にもかかわらず、あらゆる階級の人人と親しく交つたと云われている。読書範囲もひろかつたうえに、海外においても見聞をひろめたテンブルは十七世紀の知識人の一つの型を代表する。では、彼の思想的立場は、どのようなものであつたか。彼のモラリストとしての立場と彼の歴史的立場との二つの面から、眺めよう。

モラリストとしての彼の興味の中心は、人間の精神における理性と情熱 (passion) との働きをめぐる問題であつた。この問題は、当時の知識人にとつての共通の問題であつたが、彼は、理性は情熱を適当に調節することにより、人間生活を正しい方向に、すなわち自然の求める方向に導くべきである

と考へた。彼の態度は、情熱は理性によつて完全に抑制されるべきである、とのストア哲学の態度でもなく、理性は人間の精神のみならず自然の秩序をも保つ最高權威である、との合理主義的態度でもない。理性と情熱との均衡によつて正しい生活を送らうとするエピクロスの態度、すなわちルネッサンス的ヒューマニストの流れを汲む当時の《自由人》(liberal) の態度である。それ故、人間の精神に興味の中心をもつテンブルは、自然界を対象とする自然科学には、積極的な興味をいだかず、むしろ、科学による人間の進歩については、懐疑的、否定的でさえあつた。

彼の歴史観、すなわち文明の進歩についての彼の態度は、このようなモラリストとしての彼の態度に相通じる。彼は「人間は、何時の時代においても、本質的には同一である」(Man is essentially the same at all times)³ すなわち、人間の精神には進歩も退歩もないと考へる。この彼の態度は彼の代表的なエッセイである“An Essay Upon the Ancient and Modern Learning” (1690)⁴ にあきららかである。

これは、古代人と近代人の優劣論をめぐる、学問芸術における人間の「進歩」の問題を論じたものである。この「進歩」をめぐる問題こそ、スイフトの『補物語』および『書物の戦争』における中心問題の一つである。この問題は、スイフトの世界の背景において、重要な位置を占める。もちろん、テンブルが、前記の論文ではじめてとらえたのではなく、

当時の知識人の間における論争の中心課題であった。―テンブルの歴史観、そして究極的には、スイフトの世界へのアプローチの一つの鍵を理解するために、ここで、少し待ちいて、この問題が当時の知識人の間でいかに展開されていたかを眺めてみよう。

(3) 「進歩」の理念―古代人と近代人の優劣論をめぐって⁵。前章において、すでにのべたように「進歩」の理念が、ヨーロッパ人の思想のなかに育ちはじめるのは、ルネッサンスにはじまる中世から近世への転換期においてであり、それが近代人の世界観のなかに不動の地位を占めるに至るのは、十八世紀を中心とする啓蒙時代においてである。そして、この理念は、われわれ現代人の世界観のなかにも、生きながらえている。

この近代的特産物とも云うべき「進歩」の理念は、ルネッサンス期から今日に至るまで、その様相において、いくつかの段階を経てきているが、Morris Ginsbergによれば、その核心となる信心は“the belief that mankind has moved, is moving and will move in a direction which satisfies ethical requirements”⁶である。この理念は、伝統的なキリスト教的理念、ことに、前章のはじめにとらえた中世的世界観とは全く相反する。すなわち「進歩」に対する中世的否定的態度は、「キリスト紀元 (the Christian era) は人間の歴史の最後の時期、すなわち老年期であつて、人間

の歴史は、神が救済のために定めた予定数の人間をあつめることができたときに、終るのである」⁷との聖アウグスティヌスの思想に明示されている。すでに触れたように、ヒューマニストやプロテスタントたちは、この「進歩」の理念の形成者ではなかったけれど、中世的権威に対抗した近代化の促進者であつた云う意味において「進歩」の理念を約束する知的背景 (the intellectual milieu) の形成者であつた。十六、七世紀の合理主義と科学の進歩が、この理念を如何に育成したかについては、すでに述べた通りである。かくて近代の基盤とも云うべき十八世紀の啓蒙時代は、この理念のうえに築かれるのである。Brinton 教授は、啓蒙時代の根本的信念は“the belief that all human beings can attain here on this earth a state of perfection hitherto in the West thought to be possible only for Christians in a state of grace, and for them only after death”⁸であると説いているが「進歩」の理念のうえに築かれる啓蒙時代の性格を明確に物語っている。

この理念は、既述のように、理性を自然にしたがつて働かせることによつて、よりよい方向に進み得る、との素朴な合理主義的態度から生れるが、自然科学の影響のもとに、合理主義が、実験的実証の性格を帯びるにいたつて、この理念は一そう強化される。すなわち、自然科学は、合理的態度にもとずいて、自然及び人間精神の開發を企てて、つねに新しい

知識や技術や製品を蓄積することによって「進歩」の理念に確証をあたえる。十八世紀の啓蒙主義者の一典型とも云うべきコンドルセは『人間精神進歩の歴史』(Esquisse d'un tableau historique des progrès de l'esprit humain)のなかで、次のように云っている。「人類は、科学や技術における新しい発見によって、その必然的結果として個人の幸福や公共の繁栄のための諸方法における新しい発見によって、或はまた、行為の諸原則や実践道徳における進歩によって、或は更に、人間の智的、道徳的、肉体的諸能力の實質的完成——それはこれらの能力の緊張度を増し、その使用を導く諸々の器具の完成から、或は人間の自然的組織の完成から等しく生じるものであるが——などによって、人類は改善されるにちがいないのではなからうか」⁹。このような「進歩」の理念にもとずいて、文化の歴史をみるとき、当然、古人よりも近代人の方がすぐれているとの結論がでてくる。

テンブルやスイフトの時代は、かかる啓蒙時代の前夜、或は夜明けであって「進歩」の理念は、いまだ近代世界の基調として確立されていなかった。そして、このような背景は、彼らの時代に、すなわち十七世紀の後半から十八世紀のはじめにかけて、古人と近代人の優劣をめぐる論争が行われたことの必然性を物語るであらう。テンブルの前記の論文は勿論、スイフトの『桶物語』や『書物の戦争』も、この論争に一役を買った。英国の十七世紀文学批評論集を編んだ「

F. Spingarn が “...all criticism during the seventeenth century formed part of a general ancient and modern controversy.”¹⁰ とのべているように、この論争にはこの時代の文人たち——殊に、英、仏両国における——のほとんどが、直接に、或は間接に参加した。

この論争は文学史上及び思想史上において案外軽視されてきた。ことに、十八、九世紀人々は、この論争を、一般に馬鹿げた出来ごととして片づけてきた。勿論、個人的攻撃や中傷が、しばしば見出されると云う点において、この論争を「個人的論争」(personal polemics)として片づけてきた先人たちを、責めるわけにはゆかぬ。しかし、この小論において試みようとするように、近代世界の精神的基礎となつた「進歩」の理念を背景にして、この論争の意味を把握するとき、この論争が、近代文学史上及び近代思想史上に占める重要な位置に気づく。(因に、この論争を、英文学史上の重要な問題として、はじめて取りあげたのは、現在スタンフォード大学の英文学教授である R. F. Jones であって、この方面における後進の研究者は、同教授が一九二〇年、三〇年代に公にしたすぐれた研究成果に¹¹負うところが多い。)この論争の経過を——とくに英国を中心にして——簡単に眺めてみよう。この論争が、はなばなしく展開されたのはフランスについて、英国においてであるが、問題ははじめて具体的なたちでとりあげられたのは、イタリーにおいてである。すなわち

イタリヤ人 Alessandro Tassoni は、彼の著書『随想録』(Dieci libri di pensieri diversi, 1612—1620) において、学芸はながい経験と努力によって完全の域に達するのであるから、現代人が学芸において古代人よりもすぐれているのは当然である、との前提のもとにペトルルカ、ホーマー、アリストテレスなどを攻撃した。かかる見解は、古典の再発見を通して生れたルネサンスの本拠とも云うべきイタリーにおいては、てんで問題にされなかったのかも知れない。論争の舞台は、フランスにうつる。この書は、仏訳されて、フランスの知識人たちに読まれることになる。

フランスにおける論争の火蓋をきった劇作家 Boissierobert は、一六三五年自分がその創立に関係したアカデミー・フランセーズ(Academie française)における講演で、ホーマーを徹底的にこきおろした。Tassoni の前記の書物から Boissierobert が示唆をうけていたと云うことは、充分想像できることである。古典の典型としてあがめられてきたホーマーに対するこの批難は、当然、当時の友人たちの注目をひいた。デカルト的な合理主義の覚醒期とも云うべき当時のフランス(デカルトの『方法序説』Discours de la Methodes の出版は一六三七年)における反響は、イタリヤにおける反響とは違つていた。近代の優越を主張するもの、その態度に反対するもの、更に、逆に古代の優越を主張するもの、彼らが入り乱れて論戦に加つた。Desmarets de Saint Sorin, Charles

Perrault, Fontenelle などが近代党 (the Moderns) の大立物として活躍し、古典的批評家として知られているボッロー(Nicolas Boileau) が古代党 (the Ancients) を代表した。デカルトの哲学が近代党の主張を支持し、当時のすぐれた文人コルネイユ、ラシーヌ、モリエールなどの作品が、近代の古代に対する優越の確証として、とりあげられたことは勿論である。こうした論戦のなかで、近代党に確固たる優位性をあたえたのは Fontenelle であつて、彼は『死人の対話』(Dialogues of the Dead, 1683) や『古代人と近代人に関する断章』(Digression on the Ancients and Moderns, 1688) などにおいて、知識の進歩についての確信をかためた。

英国における論争は、フランスに較べて、时期的におそい。もちろん、十六世紀の終り頃から十七世紀のはじめにかけて、ベーコンの哲学が「進歩」の理念を予測した。そしてまた、一六二七年には、神学者 George Hakewill が An Apologie or Declaration of the Power and Providence of God in the Government of the World と題する論文を、公けにし、中世的な退化論 (the doctrine of degeneration) に反対し、近代は詩においては古代と同等の地位にあるが、その他の諸芸術や諸学問においては古代に優つていと主張した。また、設立当時は、宗教と学問にとつて有害であるとの批難をうけていた英国王室学会 (the British

Royal Society) を辯護した Joseph Granvill の *Plus ultra, or the Progress and Advancement of Knowledge since the days of Aristotle* (一六六八年) や Sprat の有名な *History of the Royal Society* (一六六七年) が、知識の進歩に關して、近代の優越性を示唆したが、英国における近代人と古代人との論争 (the Ancients-Moderns Controversy) を具体化したのは、ほかでもないウィリアム・テンブルである。

ベーコンの影響や、フランスにおける合理主義的な思潮の影響のもとにあつて、前述の Hakevill Granvill などの態度に示されるような近代的傾向が、ぼつぼつ英国人のあいだに萌しつつあつたが、当時の知識人の中心とも云うべき教会や大学においては、一般に、ルネッサンス的なヒューマニズムの流れを汲んで、ギリシヤ・ローマの古典に範を求める古典的態度が有力であつた。テンブルは、そのような知識人の一人である。大陸の動勢によく通じていたテンブルは当時のフランス文壇において、古典がこきおろされ、古代党がこつぱくやつつけられてゐるのに憤慨して、一六九〇年、彼の著書『雑録』(Miscellanea) のなかで “An Essay upon the Ancient and Modern Learning” なる一文を公にして古代党の辯護を試み、近代党に対抗した。この一文におけるテンブルの態度については、前節において略述したが、とくに *Aesop's Fables* と *Phalaris's Epistles* とを古典の珠玉として絶讃し、後者については “I think the Epistles of

Phalaris to have more Race, more spirit, more Force of Wit and Genius, than any others I have ever seen, either ancient and modern.” とやを云ひつゝなる。

テンブルのこの論文は、英国における論争を活発化した。一六九四年、テンブルの論文に対する挑戦として、ウィリアム・ウォットン (William Wotton) は、*Reflections upon Ancient and Modern Learning* (一六九四年) を世に問ひ、テンブルに反駁した。ウォットンは、この書において、文学の分野では近代が古代にまさるとは云えなうが、その他の諸学芸や近代的知識においては近代の方がすぐれてゐるとの彼の見解を明らかにした。この態度は、前記の Hakevill の態度に似てゐる。この近代党の態度が「進歩」の理念と結びつくのは、学問や知識における人間の進歩が、人間を完全の域に導き、地上の天国 (Earthly Paradise) を生むと考へた点にある。ついで、一六九七年、ウォットンのこの書の第二版に附して、当時の古典学者リチャード・ベントレー (Richard Bentley) の *Dissertation upon the Epistles of Phalaris* (一六九七年) が公けにされた。これは、オクスフォードの少壮学者チャールズ・ボイル (Charles Boyle) が一六九五年に編纂した *Epistles of Phalaris* を偽造書簡であると誹謗した。この書簡は、テンブルが前記の論文で、絶讃したものである。このベントレーの攻撃に対抗して、ボイルの同僚であるオクスフォードのクライスト・チ

ヤーチ (Christ Church) の學者たずは、Dr. Bentley's *Dissertations on the Epistles of Phalaris, and the Fables of Aesop, examin'd by the Honourable Charles Boyle, Esq.* (一六九八年) と題する論文を出版した。これに對してヘントレーは、第二の *Dissertation* を公けして応酬する。すると今度はウイリアム・キング (William King) が *Dialogues of the Dead* (一六九九年) を發表して、ボイル對ヘントレーの "the Phalaris controversy" そのものを皮肉る、こままぶくると、論争も少々バカけてくる。一ちようちこの頃『桶物語』を書いたスイフトは、この論争の目撃者であつた。そして『桶物語』とともに、一七〇四年に出版された『書物の戦争』は、前述のテンブルに對するウォットンの反論に對してテンブルを擁護する意味で書かれたとも云えるのである。

このように、*Phalaris's Epistles* をめぐる論争は、最後は完全な "personal polemics" に墮してしまつたが、ひろい意味における近代人と古代人の優劣論¹³をめぐる問題に ついては、Spingarn が指摘してゐるように John Dryden, Thomas Rymer, Addison, Charles Gildon, David Hume など、当時の文人や哲學者の多くが、關係してゐる。そして十七世紀の後半から、十八世紀のはじめにかけてのこの論争は、近代の思想を基礎づけた「進歩」の理念を大きな背景として、とらえられるとき、重要な意義をもつのである。この

意義の一端を、われわれはやがて『桶物語』に展開されるスイフト的世界においてとらえることになるであらう。一さて、テンブル家におけるスイフトに帰らう。

(4) スイフトとテンブル。一内外に名を馳せた老政治家テンブルのもとにおける若輩スイフトの日常生活は、人並以上に自尊心のたかいスイフトにとつて、決して居心地のよいものではなかつたであらう。書記とは云え、召使並にとりあつかわれたことは、想像に難くない。しかし、"Temple influenced him (Swift) through the operation of antipathies, not through sympathy;" と W. D. Taylor のことばは、誇張に過ぎるようだ。勿論、若いスイフトと六十才を越えたテンブルとの間には、思想的にも、生活感情の点から云つても、いろいろなくちがいがあつたであらう。しかし、スイフトは、彼の生涯を貫く思想の形成において、テンブルおよびテンブルと共に過したムア・パーク時代に、多くを負つてゐる。

ムア・パークにおけるテンブル家の智的雰囲気は、中世的な伝統を固持していたトリニティ・カレッジがスイフトに与えなかつた生新さに満ちてゐた。紳士に応しい教養を身につけることもできたし、オクスフォードやケンブリッジにおける新しい学問上の業績や科学上の新知識について、詳しく知ることでもできた。ロンドンを中心とする文壇の様子についてのニュースにも事欠かなかつた。知識欲や野心に満ちる若

者にとつては、うってつけの環境である。

そのうえ、テンブルの豊富な蔵書に接しえたことは、スイフトにとつて、大きな收穫であつた。彼は、暇をみつめては読書にふけた。ことにテンブルが死ぬ前の三年間（一六九六—一六九九年）は、一日に平均約十時間を読書に費したと伝えられている。勿論、真偽のほどはわからぬが『桶物語』に示されている古典についての彼の豊富な知識は、この時期における彼のおどろくべき読書の量を裏書きしている。大学時代に得意であつたギリシヤ語、ラテン語についての造詣が大いに役立ったことは云うまでもなす。A. Gutchkelch は、この時期にスイフトが読んだと想像し得る書物について、かなり詳しく報じているが、そのなかの主なものをひろつてみると、Homer, Virgil, Thucydides, Cyprian, Lucretius, Hippocrates, Prince Arthur, Cicero, Phalaris, Rabelais, Cervantes など。もちろん、これらの書物は、テンブルの知的背景を物語るものでもある。

なお、テンブル家に寄寓中、スイフトは、詩人になつて身を立てようと本気に考へて、詩作にふけた。彼は、生涯を通じて、多くの詩を書いたが、一般には、今日におきても、彼の詩はあまり高く評價されていない。彼の詩をめぐつて、一つの伝説のような話が、スイフトのほとんどの伝記者によつて語り伝えられている。スイフトは、ドライデンと遠縁の関係があつた、すなわち詳しく云えば、ドライデンはスイ

フトの祖母に当るエリザベス・ドライデンの甥であつた。スイフトが、ムア・パーク時代（一六九二年頃と推定される）に、自分の詩を、当時の詩壇のみならず英文壇の大御所であつたドライデンに見せたところ「ねえ、ジョンナサン、おまえは詩人なんかになれないよ」“Cousin Jonathan, you will never be a poet.”と一蹴されたと言ふ話である。このことが、後で触れるように、スイフトのドライデンに対する執拗な反感を招いたと云われる。勿論、真偽のほどはわからぬが、見栄坊で傷つきやすいスイフトにしてみれば、ありそうなことである。—テンブルとともに送つたムア・パーク時代のスイフトについては、恋愛事件など、まだ語らねばならぬこともあるにはあるが『桶物語』執筆の背景は、以上で、大体、準備された筈である。

(5) 『桶物語』の執筆と出版。—『桶物語』および『書物の戦争』『精神の機械的作用』の正確な執筆の時期については、この章の冒頭で触れたように、結論をたすことは難しい。スイフト自身が『桶物語』の制作年代として示唆している一六九六—一六九七年は、後代のほとんどの研究者の推定年代と一致しない。少しはやいのである。このスイフトのあいまいな態度について Gutchkelch は「作品の欠点がさらけだされたときに、云いのがれができるように、スイフトは、この作品が実際よりも若い時代の作品であると思われれることを、のぞんだのである」と云つて¹⁷いる。ひねくれた見解であるよう

だが、案外評判を気にしたスイフトにしてみれば、ありそうなことである。

何れにしても、出版は一七〇四年であるが、テンブルの死とともに一六九九年スイフトはムア・パークを去つてゐるから、その時までには三篇とも完成してゐたであらう、と云う点においては、研究者の意見は大體一致してゐる。そして“*This Discourse is the Product of the Study, the Observation, and the Invention of Several Years.*”¹⁾とのスイフトのことが示すように、一定のまとまつた時期に、一息に書きあけられたものでもなし。

これらのことを考慮に入れ、二、三の研究者の見解を綜合して、考えてみると、凡そ次のことが云える。『桶物語』のなかの宗教的アレゴリーの部分(三人兄弟の物語)は、一六九六―九八年に書かれ、ついで『書物の戦争』は、前述のウォットン及びベントレーのテンブルに対する反論が出版(一六九七年)された直後一六九八年のはじめに執筆された。ついで一六九九年頃に『桶物語』の残りの部分と『精神の機械的作用』が書きあけられた。『桶物語』が、二つの時期にわけて書かれており、後の部分が『書物の戦争』のあとで書かれたと云うことは、つぎの章でのべる『桶物語』の構成を理解するときに重要な意味をもつ。

この三篇が一卷にまとめられ、一七〇四年ロンドンで出版されるや、文壇はもとより、政治家や宗教家たちの間にも、

大きな反響を生んだ。作者が匿名であると言ふことが、一人一人の好奇心を煽つた。怒りと興奮と好奇心にみちた反響であつた。作者が誰であるかについて、いろいろな噂がひろがつた。風評によつて、作者であるところちあけられた人の一人 William King の如きは、*Some Remarks on the Tale of a Tub* (一七〇四年)を出版して、自分がその作者でなうことを辨明したほどである。出版と同時にアイルランドへ渡つたスイフトは、アイルランド海をへだてて、何知ぬ顔で、この光景を眺めていた。―それほど反響を呼んだこの一巻、ことに『桶物語』にきつて、スイフトは、何を、どのような立場から書いたのか。

(註) 1 Jonathan Swift, *A Tale of a Tub to which is added*

The Battle of the Books and the Mechanical Operation of the Spirit, eds, A. C. Guthkelch and D. Nichol Smith (Oxford, 1920), “Introduction,” p. xliii.

2 Cf. Ricardo Quintana, *The Mind and Art of Jonathan Swift* (London, 1953), p. 10.

3 *Ibid.*, p. 17.

4 *Critical Essays of the Seventeenth Century*, ed.

J. E. Spingarn (London, 1909), Vol. III, pp. 32–72.

5 この問題については、とくに次の書物を食うてゐるが多し。
J. B. Bury, *The Idea of Progress* (London, 1920).
Morris Ginsberg, *The Idea of Progress, a Reevaluation* (London, 1953).

- Christopher Dawson, *Progress and Religion* (London, 1938).
- Charles Frankel, *The Faith of Reason, the Idea of Progress in the French Enlightenment* (New York, 1949).
- 9 Ginsberg, *op. cit.*, p. 3.
- 7 Bury, *op. cit.*, p. 21.
- 8 Brinton, *op. cit.*, p. 369.
- 9 コントレー「人間精神進歩の歴史」(前川貞次郎訳、創元文庫一九五二年) p. 204.
- 10 *Critical Essays of the Seventeenth Century*, Vol. I, "Introduction," p. lxxxviii.
- 11 次の二著は何れも絶版であるため、参考できなかつた。しかし、私の質問に対して書簡で解答を寄せられた Jones 教授の助力に感謝しよう。
- R. F. Jones, *Ancients and Moderns, A Study of the Background of the Battle of the Books* (Missouri, 1936)
- , "Background of the *Battle of the Books*," *Washington University Studies*, VII, 99—162 (1920).
- 12 *Critical Essays of the Seventeenth Century*, Vol. III, p. 65.
- 13 *Ibid.*, Vol. I, "Introduction," p. lxxxviii.
- 14 W. D. Taylor, *Jonathan Swift, A Critical Essay* (London, 1933), p. 14.
- 15 Cf. *A Tale of a Tub*, "Introduction," p. liiii.
- 16 Cf. *Ibid.*, p. 4, p. 38, p. 44, p. 86.

- 17 *Ibid.*, "Introduction," p. xl.
- 18 *Ibid.*, p. 10.

III 『桶物語』におけるスイフトの態度

『桶物語』とともに出版された『書物の戦争』も、スイフトの全貌を知るためには、無視できない作品である。しかし、これは、既述のように、セントレーやウォットンのテンパルに対する攻撃に対抗して、書かれたもので、その性格は、この作品の完全なタイトル、すなわち *A Full and True Account of the Battle Fought last Friday Between the Ancient and the Modern Books in St. James's Library* (セントレーは聖ジェームス図書館の館長をつとめていた) に裏書きされている。それ故、『桶物語』と同時期の作品であるとは云え、その中心テーマが個人的な性格をおびてゐるので、『書物の戦争』には、内容及び構成において、『桶物語』に発揮されているスイフトの成熟さが示されてゐない。さて、『桶物語』に目を向けよう。

(1) 『桶物語』の構成。—『桶物語』の構成の骨組は、その通りである。

- ① シモン・サマース卿閣下への献辞 (To the Right Honourable John Lord Somers)
- 〔第五版からは、この献辞が An Apology になっている〕

- ② 書店主への読者へ (The Bookseller to the Reader)
- ③ 後代王子殿下に献せる書簡 (The Epistle Dedicatory to His Royal Highness Prince Posterity)
- ④ 緒言 (The Preface)
- ⑤ 第一章 序論 (The Introduction)
- ⑥ 第二章 桶物語 (A Tale of a Tub)
- ⑦ 第三章 批評家としての脱線 (A Digression Concerning Critick)
- ⑧ 第四章 桶物語 (A Tale of a Tub)
- ⑨ 第五章 近代風の脱線 (A Digression in the Modern Kind)
- ⑩ 第六章 桶物語 (A Tale of a Tub)
- ⑪ 第七章 脱線を讃ぐる脱線 (A Digression in Praise of Digression)
- ⑫ 第八章 桶物語 (A Tale of a Tub)
- ⑬ 第九章 社会における狂気の起源と効用と利用について (A Digression Concerning the Original, the Use and Improvement of MADNESS in a Common-wealth)
- ⑭ 第十章 脱線の続き (A Farther Digression)
- ⑮ 第十一章 桶物語 (A Tale of a Tub)
- ⑯ 第十二章 結語 (The Conclusion)

このように、『桶物語』の構成は複雑である。一見すれば、

R. Quintana が云うように “the astonishing maze of introductions, prefaces, sections and digressions”¹ である。しかし、これは、スイフトの魂胆あつての、みせかけの無秩序である。本文にさきだつ各項及び本文の各章は、細心の計画のもとに構成されている。(この点については、M. K. Starkman のすぐれた研究²があるので、詳しくは、それを参照していただきたい。)

それでは、スイフトは、このみせかけの無秩序によつて、何を試みようとしたのか。当時流行の「近代」作家の作品における構成の無秩序を諷刺するのである。攻撃の対象になつた「近代」作家は、ドライデン、ベントレー、ウオットソン、ライマー (Thomas Rymer)、デニス (John Dennis)、テイト (Nahum Tate) など、主としてロンドンのグラブ街 (Grub Street) を本拠とする文人たちである。

この作品の構成そのものが諷刺である。もちろん、内容においても、諷刺である。それ故、この作品は、そのなから諷刺的要素を撰りわけることができような作品ではない。作品そのものが、諷刺そのものである。この小論において、スイフトの諷刺の手法をとくにとりあけることはしないが、何故、彼が諷刺家であらねばならなかつたかについての必然的意味は、あとで明らかにされるであらう。

(2) 『桶物語』の内容。——第一章のまえにある部分、すなわち前節にかかけた骨組において①②③④を占める部分、すな

仰々しい献辞や緒言である。これらの部分の核心は当時の文壇の間に流行していた勿体ぶつた献辞や序文に対する形式上の諷刺である。その内容は、本文を貫くテーマの前奏曲とも云うべきものである。その各々についての詳述はしないが、④の「緒言」について、少し触れておきたい。

最初に、「桶物語」と云うタイトルについて説明している。彼は「水夫たちが鯨に出あうと、気を紛わすために、空の桶を投げあたえて、船に乱暴を与えるのを防ぐと云う習慣がある」と説明し、この書の意図は、この書を現代の才人たち (Wits) — 鯨にたとえられる — に投げつけて、彼らが国家—船にたとえられる—をゆすぶりもてあそんで、危害を加えることを防ごうとする点にあることを示唆している。したがって、このタイトルは、本文の内容に直接関係があるものではなく、この書物の性格を暗示するタイトルなのである。

タイトルの説明に続いて、近代的才人 (the Modern wits) に対する攻撃ははじまる。攻撃と云つても、実に巧みな諷刺的手段によつてである。その要点は、次の通りである。現代の英国には、多くの自称「才人」がいるが、彼らは、才人に応しい真のウィットに缺けている。「the noblest and most useful Gift of humane Nature」⁴ である真のウィットは、学識や正しい判断力、叡智や高尚な趣味の反映であつて、単に途方もないことや言葉の遊戯などではない、と主張する。ついで、「近代」作家の諷刺を諷刺する。「小生の良心にと

つての大きな慰めは、このような凝つた有益な物語を、一点の諷刺も交えずに書いたことである」⁵と吹聴しながら、「近代」と諷刺家の態度を諷刺する。アテネの国家における諷刺家と英国の諷刺家とを較べながら、真の諷刺家の態度をのべている部分は、スイフトがアリストファネス的な諷刺家の態度にたつて、当時の作家に流行していたルネッサンス的諷刺家の態度を攻撃していることを示す。スイフトもアリストファネスも、時代の文化的価値の過渡期に生きた諷刺家であつて、彼らは何れも古い価値基準に基いて、新しいものがはびこる社会を矯正しようとしたモラリストである。彼らの諷刺は、個人的な欠点を衝く。それに反し、ルネッサンス的諷刺は、非個人的であり、なにかを諷刺しても、それによつて特定な人間が罪せられるわけではない、むしろ、人々は、くすぐりのような諷刺をたのしむ。スイフトは、このようなルネッサンス的諷刺に反対する。これでは、何のために諷刺が行われるのかわからない。諷刺は、人間や個人の欠点を矯正するものだから、人々がそれに怒りを覚えるようなものでなければならぬ、とスイフトは考える。彼はアリストファネスの諷刺が、個人的であり、悪罵的なものである所以である。この点においても、彼は、ルネッサンスにはじまる近代的な態度に反対している。

さて、この「緒言」に続く⑥第一章「序論」を、彼は演説をぶつたための三つの道具、すなわち説教台 (the pulpit)、

梯子 (the ladder)、巡回演壇 (the stage-itinerant) についての説明からはじめる。はじめに、これらの道具の材料や用途を説くが、結局、これらは、当時の宗教や学芸の愚劣さの象徴として、とりあつかわれる。宗教と学芸に対する諷刺は『挿物語』の中心テーマである。宗教上の諷刺の対象となるのは、主として非国教徒である。近代の学芸の根城とも云うべきクラブ街の輩について、スイフトは語る、「クラブ街の賢者たちは、自らの教訓や学識を象徴や寓話の車で運ぶのを常としてきた。そして、この車を必要以上に丹念に飾りたてたので、金びかに裝飾されすぎた馬車と同じ運命におちいる。すなわち、それに一瞥を与えるものは、外面のけばけばしさに目がくらみ、想像が充満し、中に乗っている持主の手柄や才能を考える余裕がなくなつてしまつた」と。ついで、彼の攻撃は、ドライデンに集中される。勿論、ドライデンは当時の文壇の大御所であつたけれど、古典に対する態度において、決して完全な近代党ではなかつたことを考へるとき、ドライデンに対するこの集中攻撃の背後に、既述のドライデンとスイフトをめぐる伝説めいたエピソードの余韻が感じとられる。

さて、⑥第二章から、本筋に入るのであるが、さきに触れたように、この作品における諷刺のテーマは二つにわけられる。宗教上の問題と学芸上の問題とである。もちろん本質的には、この二つのテーマは、近代的傾向に対する否定的態度

と云う点で一致するのであるが。宗教上の問題は、⑥第二章、⑧第四章、⑩第六章、⑫第八章、⑮第十一章の各章、すなわち三人兄弟をめぐる物語においてとりあけられ、学芸上の問題は、⑦第三章、⑨第五章、⑪第七章、⑬第九章、⑭第十章の各章すなわち「脱線」の章でとりあけられる。

先ず、三人兄弟の物語が語られる五つの章の梗概をまとめて、簡単に解説しながら、のべてみよう。一昔、或る人が妻との間に三つ児をもうけた。兄弟の区別は産婆にもつけられなかつたほどであつたが、三人は、それぞれ、ピーター (Peter)、マーチン (Martin)、ジャック (Jack) と名づけられる。(ピーターはローマ教会、マーチンは Martin Luther の流れを汲む英国々教会、ジャックは John Calvin の系統をひく非国教徒を、それぞれ指す) 間もなく、父は死ぬが、死に際に、何時まで経つても古くならず、身体の成長とともに大きくなると云う上衣を、一卷の遺言とともに、それぞれの子供にのこす。遺言は、その上衣の着方及び取扱ひ方を詳しく説明すると共に、兄弟が仲良く暮すことを命じている。(遺言は新約聖書、上衣はキリスト教の教理及び信仰を指す) 彼らは、やがて街へでて社交界に入りするが、いつも同じ質素な上衣を着ていては、貴婦人方にはもてないし、人々からは馬鹿にされる。結局、誘惑に負けた彼らは、遺言の意味を勝手に変えたり、なんとかこじつけて、いろいろな飾りを身につけるに至る。街の流行が変るたびに、適

当に遺言の意味をごまかして、上衣に別の飾りをつけたり、上衣の型を変えたりする。遂には、遺言を金庫のなかにしまつて、特別の時以外には、めつたに開けてみないことにする始末。そのうちに、ピーターが三人のうちで頭角をあらわしてくる。彼は、ジャックやマーチンに、自分を「わが主ピーター」(Lord Peter)と呼ぶように命じ、自分こそ父の真正の相続人であると主張するに至る。彼は、いろいろ奇抜なものを発明する。(これはローマ教会がつくりあげた戒律や儀式を指す)彼の横暴は、ますます募り、遂にジャックとマーチンを自分の屋敷から追出してしまふ。追いだされた二人は自分たちの非行を悔い、今後は遺言を守つて生きることを決心する。しかし、二人は遺言の解釈においてそれぞれ違つていた。結局、二人は、それぞれ違つた方法で生きることになる(宗教改革におけるルッター及びカルヴァンの態度)。

この物語の最後の部分(第八、十一章)は、主として、その後のジャックの所業がのべられる。ジャックの狂人めいた「熱狂」(Zeal)は、風神派(ApoIists)と云ふ奇妙な宗派の仲間でもない教理を通して、嘲笑される。すなわち、風神派の教祖としてのジャックの奇抜な生活振りを描くことによつて、スイフトは、カルヴァンの流れを汲む清教徒—非国教徒—の religious enthusiasm を、さんざん諷刺するのである。—以上が三人兄弟の物語の梗概である。

つぎに、「脱線」の章にうつる。「脱線」の各章は、三人

兄弟の物語の各章のあいだに、入れられている。

先ず、③第三章「批評家についての脱線」においては、例の「近代的」文人たちが、槍玉にあけられ、「近代的」批評家は、古代の伝統に基く真の批評家ではない、と主張する。スイフトによれば、真の批評家とは「自分自身や世間のために規範をつくりあげゆる人たちであつて、その規範に従うことによつて、注意深い読者は、すぐれた文人の作品について、判断を下すことが出来、崇高なもの及び見事なものを鑑賞できる趣味を培うことができ、その上、内容や文体におけるあらゆる真の美を、實の美から識別することが出来る」これに反して「近代」批評家は、多くの読物を読み漁つて、そのなかの欠点や誤謬をさがし、掻きあつめ、誇張して、それを世人に供するのを任務とする“a Discoverer and Collector of Writers' Faults”であると主張する。

④第五章「近代風の脱線」においても、文人たちによつて代表される当時の知識人の「近代的」態度を攻撃する。彼らは、古代人のすぐれた作品には見向きもせず、「近代的」知識にのみ頼つて作品を書く。「近代」作家のホーマーに對する攻撃を皮肉つて、スイフトは「機械学の諸方面においても、彼(ホーマー)の缺点是著しい。小生は、近代才人にお馴染みの細心の注意を払つて、ホーマーの作品を読破したが、あの有益な徳用燭台については、全然、言及すら見出せなかつた。若し近代人が援助の手をさしのべなかつたら、こ

の缺点のため、われわれ今日も闇の中をうろついているだらう。尙この著者を責むべきもつと顯著な缺点是、彼がこの英国の慣習法や英国々教会の教義と戒律について全く無知であること。この缺点の故にホーマーおよび全古代人は、わが有徳聰明の友、神学士ウォットン氏のため、その比類なき名著『古代と近代の学問』において、非難をうけることになつた⁸と云う。かく「近代」作家の古典に対する態度を諷刺し、最後にスイフトは、「近代」作家の範とも云うべきドライデン大先生⁹(Our Great Dryden)が自分の作品に示した形式上の教訓を皮肉るのである。

⑩ 第七章「脱線を讀める脱線」において、「近代」才人や「近代」學者に特有な態度を諷刺する。すなわち、彼等は原本を通して深く考えることなく、索引、梗概、註釈書、参考書、辭書類、選集、文集などを讀み漁る。こうして數週間ほどすると「どんなに深遠で普遍的な問題でも処理しうる作者が生れる。頭の中は空っぽでも、備忘録にいつばい書き込みがあれば、方法と文法とでつちあひの点だけ大目に見てやり、必要なら他人の文章を写しとり、本題から脱線する特権を認めてやりさえすれば、一卷の書を書きあけるための内容には事缺かぬ」そして、もしこのような斟酌がなされないうなら、「われら近代才人が性質を異にする無数の項目について寄せあつめた文集を世に紹介する機会をどうして持つことが出来よう」とスイフトは辛辣な筆を運ぶ。

⑪ 第九章「社会における狂気の起源と効用と利用について」は、この作者において重要な位置をしめる。この章が『桶物語』のクライマックスであることについては、R. Quintana & M. K. Starkman も同意見である。¹⁰ “This unit is the most effective and persuasive in *A Tale of a Tub*; it marks the climax of the book, and it establishes the essential unity of Modern excesses in religion and learning; both are reduced to absurdity and madness.”¹⁰との Starkman の見解はこの章の性格を端的に物語っている。そのタイトルが示すように、この章では「近代」人の狂気が分析される。狂気とは、知能が顛倒し、頭脳の位置がずれている状態を云い、新国家の建設や哲学上の新学説の展開や宗教上の新宗派の出現は、この狂気に原因する。勿論、スイフトは、新知識に熱狂的な「近代」人や英国々教会に反対する諸教徒たちの態度を攻撃するのであるが、スイフトの根本的態度をかなり明確に示している彼のことをば引用してみよう。

「およそ頭脳が、自然の位置にあり、静かな状態にあるとき、その頭脳の持主は正常な生活を送り、自分の権力や理窟や幻想に大衆を隷屬させようなどとは考えない筈である。また人智の手本通りに悟性 (Understanding) を形成してゆけば、大衆の徹底せる無知や自分自身の弱さを悟るから、自分

勝手な考えに従つて党派を構えるなどと云うことにはならぬ。ところが空想 (Fancy) が理性に打ちかち、想像 (Imagination) が感覺 (Senses) と相争い、正しい悟性が常識と共に追いだされるとき、第一に生れでる改宗者は、その御本人で、ひとたびこれに成功すれば、強い欺瞞の力が内からも外からも有力に働いているから、他人を改宗させるのは容易なことである。巧言と幻の耳と眼におけるは、くすぶりの觸覚におけるに等しい。人生において高く評価される喜びと楽しみは感覺を欺き遊ばしめる如きものである。悟性と感覺との両者についての A 幸福 V なる言葉の普通の意味を調べてみると、その性質と屬性とは次の短い定義の中に完全に要約される——幸福とはうまく欺されている状態の、不¹¹断の所有である。』ついでスイフトは理性の働きについてのべる。事物の表面に終始する賢明な軽信さの方が、理性に基く好奇心によつて事物の深みへ入り込み、内部の欠点をさらけだすことよりも、平和な精神状態であると云う。事物は外部と内部とで非常に異なるが、理性は表面を切開して内部に入りこみ、内部の仕組を証明しようとする。「私の知り得た限りでは有形物はすべて外部の方が内部よりもずつと好ましい。この点について最近いくつかの実験をやつて確かめた。先週、皮を剥がれた身を見たが、その姿が如何に醜く変つていたかは想像以上である。』¹²すなわち、スイフトは、情熱の調節者である理

性の任務をみとめるが、理性が狂気によつて麻痺され、その結果、常識の範囲を超えて事物の内部にメスを入れることになる科学的立場に反対する。ここに反合理主義者としてのスイフトの態度がみられるのであるが、これについては、章を改めて論じたい。

さて、この作品のクライマックスとも云うべきこの章のあとに、⑭第十章「脱線の続き」が続くが、相変らず「近代」作家の諷刺で、とくに取りたてて論ずべき問題も提出されていない。続いて第十一章で三人兄弟の物語が終り、⑯第十二章「結語」で『桶物語』は終るのであるが「今こうして筆を執つているのは、近代作家の十八番、すなわち筆のからまわり、書くことが無くなつた後も、筆だけは動かしている次第」¹³と、「結語」において「近代」作家の結論における態度を皮肉つているあたり、スイフトの徹底した諷刺の態度がうかがわれる。

以上『桶物語』を構成する各部分の要点を簡単に眺めたのであるが、つぎにこの作品にあらわれたスイフトの態度をまとめて考えてみたい。

(3) スイフトの態度。以上みてきたように、「桶物語」における諷刺の対象は、宗教界における熱狂的態度と学芸の分野における近代的傾向の二つに分けられるが、要するにスイフトは近代性 (Modernity) への否定的態度を表明したわけである。この近代性の背景については、この小論の第一、二

章でとりあげたが、要するに近代性の核心とは、中世的權威から脱却し、近代科学の勃興、新しい経済体制の整備などに条件づけられ、ベーコンやデカルトの哲学によつて理論的に基礎づけられた合理主義であり、科学が生む新しい知識や技術に幻惑されて人類の「進歩」を確信し、近い将来に地上の天国が生れると考ふる樂觀的な世界観である。勿論、スイフトの背景をなす時代は、かかる近代性を確立した十八世紀すなわち啓蒙時代ではなく、近代化の育成期の最後の時期である十七世紀の後半に属すと云うことは、すでにのべた通りである。―さて、かかる近代性へのスイフトの否定的態度を通して、スイフトの人間像を把握し、スイフトの世界の基調を考えてみよう。

一般に認められているようにスイフトは諷刺家である。そして彼の世界は諷刺の世界である。しかし、諷刺家であると云うことは、表現上の効果的な技法として諷刺を用いたと云うことだけを意味するのではない。むしろスイフトは作家として諷刺家以外の立場をとり得なかつたのではないか、と私は考ふる。すなわち諷刺家とならねばならなかつた必然性が彼の人間像及び彼の世界に内在するのではないか、と考ふる。

M. K. Starkman はスイフトの態度を次のように要約して云ふ。“Swift was a satirist because he was a moralist; he was a moralist because he was a Christian; and because he was so earnest a Christian, he was a pessimist.”

14
simist: 端的であるが意味深い説明である。彼が諷刺家であるのは、彼がモラリストであるからである。彼は世間の悪を改め、世の人々を正しい方向に導こうとする。しかし、モラリストが何故諷刺家にならねばならなかつたのか。それは彼が、彼の時代の思想的基盤である合理主義とは本質的に相容れぬキリスト教的伝統に立つモラリストであるからである。かく、時代の主流に否定的である彼は、結局ペシミストとしての態度をとらねばならなくなる。―このことを、もつと深くほりさけて考えてみよう。

彼はテンブル家を去つた後に英国々教会の僧職につくが、彼が真摯なキリスト教徒であつたと云うことは、彼が西欧文化の最も古い伝統の一つに立つて示す。そして、スイフトの世界は、このキリスト教的世界と合理主義的世界との相剋のなかに形成される。彼は自分が生きている時代から離れて孤高の境地に安住する聖者ではなかつた。彼もまた時代の子である。近代的な思想的環境のなかに育つた近代人の一人である。理性に対する彼の態度がそれを物語る。

素朴な合理主義は、情熱の抑制者としての理性の役目を信じ、自然本来の姿にしたがつて理性を働かせることによつて人間はすべて正しい生活を送り得ると信じた。スイフトは、この理性と自然との統一性 (the uniformity of reason and nature) の理念を把握して云つたと云う意味に於いて、合理主

義者である。「あらゆる人間は神によつて授けられた合理的な言葉が示すように、彼にとつて、理性は神によつて人間に与えられたものであり、その理性が範として働く自然本来の姿は、神が啓示するキリスト教的世界であつたのである。このように、実証的段階に達しない素朴な合理主義は、キリスト教的伝統に立つスイフトによつてもうけとられた。

しかし、合理主義が科学と直結して經驗主義的実証的性格を及ぶに至つて、スイフトは合理主義についてゆけなくなる。すなわち自然の法則に従つて働く等の理性が、逆に自然の組織にメスを入れ、神の啓示に委つて自ら自然及び人間を支配しようとする近代的合理精神は理性の誤用であり、その誤用を導いたものは、ほかでもない理性が抑制すべき筈の恣意や情欲なのである。このスイフトの態度は、すでに触れた『桶物語』第九章におけると同様、次の言葉にも明らかに示されてゐる。“It would be well, if People would not lay so much Weight on their own Reason in Matters of Religion, as to think every thing impossible and absurd which they can not conceive. How often do we contradict the right Rules of Reason in the whole Course of our Lives? Reason itself is true and just, but the Reason of every particular Man is weak and wavering, perpetually swayed and turned by his Interests, his

Passions and his Vices.”¹⁶ において彼は反合理主義者 (anti-rationalist) になる。すなわち理性を具えながらも、なお非合理性に満ち、理性の誤用によつて神を見失う現実の人間なかに狂気を見出す彼は、近代的な実証的合理精神に否定的となる。

近代科学に結びつくかかる実証的合理主義が「進歩」の理念に貫かれる樂觀的世界観を生むことは、すでに繰返して述べた。スイフトは、この世界観に反対する。彼は、人間の本性のなかに完全性を見出さなかつたばかりか、悪 (Vice) を見出し、墮落 (Depravity) を見出した。かかる墮落の底に彼は人間の傲慢 (Pride) を見る。R. Quintana がのべているように、人間の醜さの本源を、この傲慢と云う原罪において確信するとき、スイフトは人間に嫌悪を覚える人間嫌 (misanthrope) になる。かかるスイフトが、人間世界は完全に向つてあると確信する世界観、すなわち「進歩」の理念に反対するのは当然である。

このように近代の子でありながら近代的になり得なかつた彼は、非近代的近代人であり、近代世界に生れながら近代的世界観をもち得なかつた彼の世界は、非近代的近代世界である。

かかるスイフト的世界をさまざま非近代的近代人スイフトは、何処に解決を求めたのか。彼の時代思想を貫く価値基準

に否定的である彼は、それにかわる価値体系を何処にみつけたのか。何処にもみつけることはできなかった。彼は近代性を攻撃する。彼の周囲にごろごろしている近代人の狂気を愚弄する。彼は怒り、責め、嘲る。しかし、安心感はないのである。『補物語』は、それが攻撃する近代性にかわるよりどころを提示しない。それが攻撃する時代の価値基準にかわる価値体系を示さない。勿論、スイフトは古代人を見習うことを説き、神の摂理のもとに正しく生きることを説きはする。

しかし、このような肯定的な面は、彼の徹底的な否定的態度のもとに、殆どおしつぶされている。近代人の傲慢さ—罪—が彼を圧倒する。彼は近代世界が迫りつくべき危機を感じた。しかし、その危機を打開すべき確かな途をみつけることはできなかった。ここにモラリストとしての彼の限界があり、ペンシストとしての彼の運命がよこたわる。

スイフトの世界は、そのなかで近代的なるものと伝統的なるものとが相争う煉獄の世界である。この苦悩する非近代的近代世界の基調は、救いのない近代的イロニーを予言し、イロニーの危機を意識するが故に救いを求めて悶える現代的不協音を前奏する。余りに酷いペンシズムは非近代的近代人スイフトを狂人として殺した。しかし、スイフトの世界は死んでいない。近代的イロニーのきびしい運命を背負つて救いを求めての、たちまちまるわれわれ現代人のなかに、スイフト的世界のうめきが聞えるのである。

(註)

- 1 Quintana, *op. cit.* p. 87.
- 2 M. K. Starkman, *Swift's Satire on Learning in A Tale of A Tub* (Princeton, 1950), Chap. V, pp. 106—146.
- 3 スイフトは、鯨にたとえられる現代才人(Modern wits)を代表するものとして Thomas Hobbes's *Leviathan* (1651) を以てしているが、これは“Leviathan”の語義が「海獣」をあらわすと共に、この書の性格が、スイフトの攻撃の的となる近代的性格をあらわしているからであると想像される。
- 4 *A Tale of a Tub*, p. 18.
- 5 *Ibid.*, p. 48.
- 6 *Ibid.*, p. 66.
- 7 *Ibid.*, p. 92.
- 8 *Ibid.*, p. 128.
- 9 *Ibid.*, p. 148.
- 10 Starkman, *op. cit.*, pp. 138—139.
- 11 *A Tale of a Tub*, p. 171.
- 12 *Ibid.*, p. 178.
- 13 *Ibid.*, p. 208.
- 14 Starkman, *op. cit.*, p. 23.
- 15 Jonathan Swift, *Prose Works of Jonathan Swift*, ed. Herbert Davis (Oxford, 1948), Vol. IX (*Irish Tracts 1720—1728 and Sermons*), p. 161.
- 16 *Ibid.*, p. 166.
- 17 Quintana, *op. cit.*, p. 301.

『箱物語』が出版されてから、二五〇年を経た今日、スイフトの時代にはなかつた原爆や水爆などの“elaborate methods of killing people”¹⁾をはじめ多くの文明の利器がわれわれの周囲に氾濫している。偉大な進歩である。この進歩は実証の合理精神と近代科学の所産にほかならない。

スイフトが攻撃した「進歩」の理念は正しかつたのか。かかる近代的産物のおかげで人類はよりよくなつたか。この二五〇年間に人間はより完全な姿に近づいたであらうか。否、であると私は信じる。むしろ、かかる科学の技術に支えられ近代文明の重圧のもとに、道徳的基準を失い、魂のよりどころを見失つた現代人は、自らのうちに危機を意識しつつある。現代の文化がカラストロフィに直面しており、それが克服されぬ限り、現代の明日は保証され得ないと云う不安は、多くの現代人の心をとらえつつある。この現代のカラストロフィ—ことにヨーロッパ世界を中心とする—の濫觴を十七、八世紀に求めることは誤つてゐるであらうか。

「西欧世界におけるわれわれは、なお啓蒙時代の子供である」²⁾と Brinon 教授は明言してゐる。現代に流れ込む近代思想の主流は民主主義とマルキシズムによつて代表される。この両者は何れも「進歩」の理念に基礎づけられた近代的合理精神の所産、いいかえれば近代科学の副産物である。既述

のように、実証の合理精神に基いて自然のメカニズムを追究し、それを改組して新しい創造的構成を行わんとする近代科学の基礎理念は、単に自然界のみならず人間や人間社会、世界観のなかにもくひ込み、近代世界の形成者となつた。すなわち人類の「進歩」を確信する楽観的世界観のもとに近代のデモクラットやマルキストによる革命が行われたのである。下村寅太郎氏はこの点について次のようにのべている。「近代の革命は十七・八世紀のイギリス、アメリカ、フランス、更に今世紀のロシアの革命に於てその代表的事例を見ることが出来る。自然科学の場合と同様にこれも当時は未だ宗教的性情を帯びていたが世間化せられて、十八世紀末のフランス革命は端的に「理性」の名に於て行われる。現代のロシア革命に到つては純然たる「科学理論」の下に指導される。近代の社会科学はこれらの革命を謂わばその実験として、その過程に於て生成したと云うことができる。かゝる社会科学や歴史理論は啓蒙主義の精神的な徹底という外ない」更に「啓蒙主義は近代史の単なる一つの段階として、単なる過去の一つの傾向思潮ではない。啓蒙主義は哲学史に於ては克服されたものとされているが、しかし現実の世界史に於ては決して克服されていないことは現代史の実際がこれを示している。寧ろ逆に現代の世界史の支配的勢力であるアメリカ並びにソ連の建国の精神、その指導的理念は正にこの所謂啓蒙主義の精神に外ならぬ。のみならずこの精神が単純に消滅する

ような兆候はまだ認められないのである」と。人類の「進歩」を信じる樂觀的世界觀で幕をあげた近代の舞台が辿りついた悲劇的な終幕、しかもその舞台上で不穩に対立する二大陣営が何れも啓蒙時代の子供であると云うこと、これこそ現代の明日の運命が托されている近代的イロニーであり、近代的合理精神が辿りついた“rational suicide”⁴の皮肉な運命である。

十九世紀以降今日に至るまで、この近代の皮肉な運命を感じ、近代性に対して否定的態度をとる哲学者や歴史家が、現代の生き得る途を求めて努力してきた。神を失える現代の危機をいちはやく予言したニーチエの流れはキェルケゴールからハイデッカー、ヤスパーズを経て今日の実存主義者たちと連る。また、神なき近代にかわる新しい中世を予言したニコライ・ベルジャエフ、歴史家として近代的世界觀を否定するシュペングラー、クリストファー・ドウソン、アーノルド・トインビーなど、或はライオンホール・ニーバー、T・S・エリオット、バートランド・ラッセルなど、彼らが追求し提起する新しい文化の価値体系はそれ／＼様相を異にするが、何れも近代性の否定から出発し、現代のカタストロフィを克服せんとするきびしい試みである。殊に第一次、第二次両大戦を終えた今日、近代を克服せんとする現代のあがきは極めて切実である。

十七世紀のおわり、近代化の基調が整備されつゝあつた矢先に、その近代化が辿りつくべき運命の狂態を感知したスイフトは、近代性に対して否定的態度をとつた。『桶物語』は、そのようなスイフトの態度に貫かれている。勿論、『桶物語』は現代の問題についての打開の策を教えてはくれない。しかし『桶物語』は現代の危機の核心を衝いている。それは哲学の書でも、神学の書でも、歴史の書でもない。彼の時代の多くの哲学者、神学者、歴史家こそ、スイフトが抗議した近代性の形成者であつたのである。また『桶物語』のなかに聞かれるのは聖者の声でも、予言者の声でもない。自らの時代に、自らの周囲に、自らの生活のうちに、そして自らの精神のうちに、合理主義的理念とキリスト教的伝統と狂態を演じる現実とのきびしい相剋を感じとつた人間の声である。キリスト教的伝統にたちながら、反キリスト教的な時代の子として、近代人の運命のきびしさを全身に感じとつた誠実な人間の抗議である。近代性の重圧にへしまけられた人間の苦しい抗議である。そして究極的には、理性をそなえる人間のPrideと人間の獸性―罪―の意識との相剋である。そんな相剋のなかに生きながら、彼は自分自身をごまかさなかつた。その苦しみのなから文学作品や political pamphlets が書かれたとき、それは冷い諷刺の假面をつけていた、時に苦しみの余りその假面は痙攣しているけれども、これが近代性の形成者であつた彼の時代人の間に見当はずれの嫌悪を生んだ

『桶物語』の意味が、今日においてはじめてわれわれ現代人の心を衝く所以であり、それが古典として生きている所以である。しかし、勿論、創作上のすぐれた技法がなければ、スイフトの文学は成立しえないであろう。

彼の創作上の技法、とくに諷刺の技法はすぐれている。しかし“As an artist, Swift's greatness is indisputable. Partly, this greatness lies in the incomparable matching of substance and voice. Its chief source, however, is not craftsmanship but the moral realism through which all of Swift's terrific intellectual intensity found expression.”⁵と Quintana の言が示すように、彼の天才は単なる技巧の天才であるのではなく、彼の思想と技法とが表現にあつて渾然と構成されてゐる点にある。彼の表現手段は云々“his *alter ego*”⁶である。この点について“*That it [Swift's method] is for more than technique, that it is imagination and intuition, we acknowledge consciously or otherwise through our response to the satiric work of Swift taken as a whole—consciously when we recognize the presence of the artist, instinctively when we think we see a soul writting in indignation.*”⁷との Quintana の見解は、核心を衝いてゐる。スイフトは天才であり、『桶物語』は生々しい古典である。スイフトの世界、すなわち苦惱する非近代的近代世界のない

かに、現代人は自らの苦しみ of prototype を感じとる。そして『桶物語』の背景と意味とから、われわれは現代が向うべき方向についての意味深い示唆を感じとることができるのである。—現代は何処へ歩むのか。現代のカタストロフィから、どんな明日が生れるのか。人間が自らの傲慢さを清算して、近代人が見失つた神に再び魂のよりどころを求める、そんな新しい中世が生れるのであろうか。あるいは、近代から受けついで現代の狂態は、不治の病であつて、やがて人間を自殺に導くのであろうか。スイフトの世界は、われわれにとつて切実である、そして全く未解決である。

(一九五四・一・三〇)

(註) 1 Dawson, *op. cit.*, p. 6.

2 Brinton, *op. cit.*, p. 492.

3 下村寅太郎、科学と近代世界、「現代史講座」(創文社、一九五三年)第一巻 p. 92, p. 95.

4 Dawson, *op. cit.*, p. 24.

5 Quintana, *op. cit.*, p. 364.

6 Quintana, “Situational Satire: a Commentary on the Method of Swift,” *Studies in the Literature of the Augustan Age, Essays Collected in Honor of Arthur Ellicott Case*, ed. Richard C. Boys (Michigan, 1952), p. 264.

7 *Ibid.*, p. 265.